

談 話 室

ニンジンでしょ，タマネギ，キュウリに，トマト

双子が2歳くらいの頃から，よくスーパーに連れて行くようになった。小さい手をいっぱいにはばしては、「あれ，なゝに？」と聞くので，ひとつひとつ手に取らせて名前を教えてあげた。「キャベツ」が上手く言えないのか，何度言っても「キャツベ」と言う姿に思わず笑いがこぼれた。

まだ，私が野菜や果物の名前を教えてあげられるくらいは良かった，と最近思う。2年くらい前からだろうか。近所のスーパーに外国産の商品が多く並ぶようになったのは。パプリカ，エシャロットくらいならまだわかる。でも，どう見ても草にしか見えない香草の名前や，白いナスや，見たこともないような野菜を何て教えてあげればいいのかとまどう時が多くなった。名前さえわからないくらいだから，その野菜や果物の匂がさらにわからない。

私が子供の時はわかりやすかった。夏になれば店頭には並ぶ西瓜。大きな粒の枝豆，トウモロコシ。真っ赤に熟したトマト。秋になると南瓜に里芋にサツマ芋。甘く煮付けたおばあちゃんのお総菜も美味しかったし，そのままふかしてオヤツで食べても美味しかった，と舌が記憶している。

今では，そのほとんどが食べやすいサイズにカットされ，冷凍食品として売られている。

「食」とまどいを感じ始めた2年前，日本で初めてのBSE感染牛が報告された。農林水産省が「安全宣言」を出した後もなお，BSE感染牛は次々と報告された。翌年には，政府の買い取り事業対象外の肉を混ぜ，業界団体に買い取らせていたメーカーの社員が，詐欺容疑で逮捕された。他方で，日本で使用が禁止されている農薬を使った野菜が輸入されていたことも発覚した。店頭には並べられるだけで，無条件に「安全」と信じていた商品に消費者から疑問が投げ掛けられるようになった。

人を良くする，と書く「食」が崩れている。子供の口に何を入れればいいのかと，私は去年，番組の取材で食の先進国デンマークに飛んだ。

玩具のレゴ，人魚姫のアンデルセンなどで知られるデンマークは，農産物の自給率

は野菜，果物を除いてほとんどが100%を超える。特に畜産物については豚肉523%，牛肉174%，鶏肉195%との高い自給率を誇っている。日本が，消費量の42%を輸入している豚肉のうち，33%がデンマーク産であることを考えると，日本とつながりが深い国なのである

デンマークでは，驚くことばかりであった。

大学を卒業した若者が，会社経営と同じレベルで農業経営を選択するほど農家の位置づけが高いこと。小売店で売られる肉や野菜は，食品加工工場はもちろん，生産者まで全てトレーサビリティが可能なこと。

生産者の「食の安全」意識も高い。残留農薬をなくすために，家畜の飼料には化学肥料，農薬などを使わないこと。元気がない豚には砂糖水を飲ませ，育ちのよくない豚には鉄分の多い飼料を与えるなど，豚の健康管理にも気を使うことが常識だという。

消費者はどうなのか。スーパーで買い物をする人たちは商品の値段ではなく生産国，鮮度を目安に買い物をする。国や農家，加工など，その全てに信頼を置き，ラベルが偽装されているなんてあり得ない，と言う。

子供たちは何を食べているのか。小学校のお弁当の時間を見学した。黒パンにゆで卵かハム，胡瓜か人参，セロリを1本。先生を含めて皆が同じような調理のいらない，簡単なメニューであった。食材の鮮度が高い印である。

農地が国土の62%を占め，農業がGDPの20%を占めるデンマークでは，政府が「食の安全」を守るために様々な努力を行ってきた。法律を整備し，省庁を再編し，生産者や消費者への啓蒙活動を行い，共に安全性を追求してきた。その結果が，デンマーク産の農作物につく「安全」という付加価値と，人々の食に対する意識の高さ，である。

デンマークで，調味料をつけなくても美味しい野菜やお肉の加工品を口にして思った。こういう環境で育った食材を子供に食べさせたい，と。母親として，種類は少なくてもいいから，安全で美味しい食べ物の記憶を子供たちに残したい。そして，日本では，まだ可能性がある，と信じたい。

(キャスター 蓮 舫・renho)